

ズームレンズを持って桜を撮りに出かけよう!

前回の基本編では、ズームレンズの広角側、望遠側の活かし方を解説した。そこで、今回はズームレンズを持って、桜の撮影にチャレンジしてみよう。被写体までの距離を自由に变えることができない風景撮影において、ズームレンズ1本あれば、さまざまなシーンに対応できる。今年はデジタル一眼レフを持って、いろんな桜の表情を捉えてみよう。

写真・文・竹澤宏

※本連載では、特に断りのある場合を除いて、レンズの焦点距離を「実際のレンズの焦点距離(35ミリフィルム換算値)」で表記しています。

デジタル一眼 STEP BY STEP



STEP 1 桜はできる限り 順光で撮ろう

写真は、被写体の向こうに太陽などの光源を置く、いわゆる「逆光」で撮るのがきれいだといわれる。確かに新緑などは、逆光でないと光の輝き感はないし、人物も逆光に輝く髪の毛などは美しい。

だが、その半面、逆光での撮影は、影がきつくなるし、露出補正しないと暗い写真になってしまうなど、難易度も高い。だからこそ、難易度の高い逆光にチャレンジしようという気持ちも湧いてくる。

だが、桜、特にソメイヨシノに関しては、太陽を背にした「順光」で、桜に充分に光が当たった状態を撮影するのが順当な選択である。桜の花にしっかりと光が当たっていないと、桜の持つ微妙な淡い色合いは出てこないのだ①。

淡いピンクの桜と青空の組み合わせも、永遠の定番アングルである。この場合、桜の花に露出を合わせると、自然に背景の空は濃い青空になってくる。この時、逆光で狙うとすると、空が白トビになってしまう。こうしたことから、桜は順光での撮影がお勧めなのだ。撮影地に着いたらまず、太陽がどちらの方向にあるか確認しておこう。

① ソメイヨシノは順光で



ソメイヨシノと青空という桜定番写真。短い開花期間中の晴天の日を選ぶのも写真テクニックのうちのひとつといえる。天気には勝てないが残念なところ。

STEP 2 望遠で寄ってみる、 広角で引いてみる

桜を撮る時に考えてほしいことが2つある。1つは、桜そのものの美しさを表現するということ。そしてもう1つは、せっかく桜の名所に行くのだから、その場所を表現するということである。

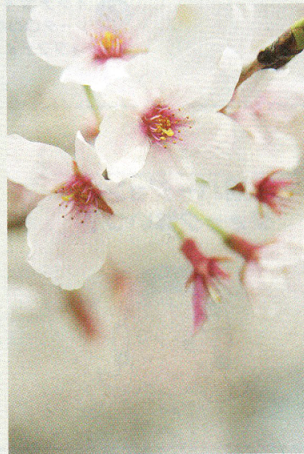
そこで、ズームレンズの広角側から望遠側まで駆使して、寄ったり引いたりして撮ってみよう。昨今のズームレンズは最短撮影距離が短く設計されているものが多く、レンズキットに同梱されているレンズでも30〜40センチくらいまで被写体に近づいて撮影できる。50ミリ程度の焦点距離で30センチくらいまで近づけば、ハガキが画面いっぱい収まる程度まで、大きく写すことができるはずだ。

花の近接撮影は、三脚で固定するのが定番だが、三脚でカメラを固定したところで、風が吹いて花が揺れてしまえば、元も子もない。この場合、風が収まるのを待つ根気も必要になる。超望遠レンズで離れたところから花を狙う場合は、三脚でフレーミングを固定する必要もある。だが、レンズキットの中望遠レンズ程度なら、手持ちで自由にフレーミングを探ったほうが得策だ。手ブレ補正機能のついたカメラやレンズが増えていることも心強い①。

そして、周りの情景も入れたいと思ったら広角側で撮影しよう。近接撮影ばかりではパターン化してしまう。それに、周囲の状況と一緒に桜を写すことで、どこで撮った桜かがわかるとあとから見た時にうれしいものだ②。

なお、桜の名所には、花見客も多い。そんな花見客で賑わう様子を撮るのも悪くないが、花をきれいに見せたいならば、花見客や通行人、市街地なら電線や電柱などはできるだけ排除したい。そんなことを念頭に置きながら根気よくアングルを探してみるとよい③。

① 手持ちでフットワーク良く



天気がよければ、1/2500〜1/5000秒くらいのシャッタースピードが切れるので、中望遠レンズ程度なら手持ちで撮影可能だ。目線の高さくらいに咲いた、きれいな花びらを捜して狙ってみよう(1/5000秒/F5.6/ISO100/105ミリ(157ミリ相当))。

② 周囲の情景を取り込もう



馬事公苑の桜。左に傾いた桜の木と練習場の馬を配置するバランスを考えながら撮影している(1/4000秒/F10/ISO320/28ミリ(42ミリ相当))。

③ 人の流れが絶える瞬間を狙おう



住宅街の緑道の桜並木。桜を眺める通行人の多いところでも、しばらく待つと人どりが途絶える瞬間がある(1/3000秒/F9/ISO640/28ミリ(42ミリ相当))。